

絶滅危惧鳥類シロハラサギの飼育下繁殖技術の確立に向けた アオサギの孵化育雛研究

東京動物園協会 野生生物保全基金 令和6[2024]年度助成【一般部門】

兵庫県立コウノトリの郷公園 松本 令以 (シロハラサギ保全チーム 島野 智之)



シロハラサギ

White-bellied Heron (*Ardea insignis*)

- 国際自然保護連合のレッドリストでCRに分類されている。インド、ブータン、ミャンマー、バングラデシュなどの山地の渓流に生息している。世界全体の推定個体数は60羽以下であり、そのうちブータンには27羽の生息が確認されている。
- ブータン王立自然保護協会が2021年にシロハラサギ保全センターを設置し、生息域外保全に取り組んでいる。
- 日本の研究者や獣医師らで構成されるシロハラサギ保全チームが、2019年からブータンにおける飼育下繁殖の取り組みを支援している。

目的

- サギ類やコウノトリ類などの大型鳥類を人工育雛する際には脚の成長異常がしばしば発生し、その原因として、不適切な床材や給餌量の影響が考えられている。シロハラサギの人工育雛においても、脚の成長異常を防ぐことが飼育下繁殖成功に向けた課題の一つになっているが、サギ類の人工孵化・育雛に関する先行研究は極めて限られている。
- シロハラサギの人工孵化と人工育雛への応用を目的として、シロハラサギと同属のアオサギについて、孵化温度、雛に使用する床材、雛の餌要求量、餌種による成育率の違い、成育後の野外での生存状況等を調査するため、本研究を実施した。

材料と方法

- 卵の採取：兵庫県豊岡市内のアオサギのコロニーにおいて、複数の巣から計5個の卵を採取した。
- 人工孵化：孵卵器を用いて人工孵化させた(温度37.3~37.4°C、湿度50%前後(嘴打ち後は70~80%)。
- 人工育雛：人慣れを防ぐため自作コスチュームを着用し、複数の条件(床材、餌種、餌量)で人工育雛した。
- 放鳥：成育後、標識(足環装着)してから放鳥した。

結果と考察

- 卵重は概ね想定直線に沿って減少し、孵化した5羽に外見上の異常は認めなかった。
- 1週齢までは、ドジョウ給餌個体の体重増加はニジマス給餌個体よりも悪かった。
- 孵化直後から床材を趾の爪で引っ掛け握る行動が見られた(育雛時の床材は平らなトリカルネットが良い)。
- 握れない床材では趾が閉じた状態となり、採餌時に体が安定しなかった。
- 育雛初期に趾で握れない床材を使用すると、趾や脚が変形し、採餌不良・成長不良となる可能性がある。
- 1週齢以降は、給餌量や給餌回数にかかわらず、体重の推移はほぼ同じだった。
- 1日3回欲しがるだけ与える方法が最も簡便な人工育雛方法であると考えられる。
- 5羽すべてが成育し、国内で初めてのアオサギの人工孵化・人工育雛の成功事例となった。



ヨシ原に作られたアオサギの巣



コスチューム飼育



4日齢のアオサギの雛



放鳥したアオサギ

研究成果の公表

シロハラサギの保全活動



ポスター発表
(日本野生動物医学会)



ワークショップの開催



ブータンへの専門家の派遣



リーフレットの作成

※本研究に助成を賜りました東京動物園協会野生生物保全基金に深謝いたします。また、本研究の実施にあたって協力をいただいた(公社)日本動物園水族館協会加盟施設、シロハラサギ保全チーム、(公財)山階鳥類研究所および鳥類標識調査員、兵庫県立コウノトリの郷公園の各関係者の皆様に感謝いたします。